

《巻頭言》ルソーの音楽観からみえてくるもの

神原雅之

最近、ジャン＝ジャック・ルソーの名著『言語起源論』(小林善彦訳、現代思想社、1970)を読んだ。この著作は彼の死後3年目、1781年に初版が発行されたようだ。周知の通り、思想家であるルソー(1712-1778)は音楽辞典を著すほどの優秀な音楽学者であった。言語と音楽の成立について自論を展開したこの著作は、示唆に富んだユニークな記述が散見される。特に、絵画を比喻しながら音楽の役割について述べているところなど実に面白い。

ルソーによれば、私たちは絵をみて、その色彩に感動するのではない。色彩は感覚に属するものである。音楽における色彩は音色である。音色は感じるものであって、それに生命や魂を与えるのはデッサンであると説く(p.109)。私たちが音楽を聴いて感動するのは、輪郭が描かれているからであるとし、旋律の役割を強調した。また情動的な表現について「身体的欲求が動きを生み、(精神的欲求である)情念が声を発せさせた」(p.21)と述べ、言葉と音楽が深く結び付いていることを指摘している。つまり、音楽と言語は共通の源泉を持っており、言葉の自然な抑揚が音楽の根底にあると言う。

一方、和声の存在については慎重な態度をとっている。ルソーによれば、和声は慣習によるもので訓練の無い耳には喜びはもたらさない。和声に対する感覚は、長いトレーニングの後に獲得されるもので習慣が欠かせないとし、学習の必要性を指摘した(pp.115-116)。この見方のターゲットになったのは作曲家ラモーである。ラモーは、和声は訓練を持たない者であっても高音部を聴けば低音が予感される、つまり誰でも和声感があると説くのに対して、ルソーは真っ向から反論した。

ルソーが生きた時代は18世紀。ポリフォニーの音楽が終焉を迎え、新しい時代(ハーモニー)の到来が予感される時代であった。概して、世の中が変化を求める風潮の中で、ルソーの自論は、音楽のもっとも自然なあり方は何なのか、音楽的情動を生み出すのは何なのか、という音楽の原点に立ち返ろうとするものであった。彼は多くの著作の中で「自然な状態」であることを強調したが、ここでもその自論を展開している。

私たちが21世紀を生きようとするとき、この「自然な状態」に立ち返ろうとする態度は重要である。政治・文化・経済が混沌とし、多様な価値観が渦巻く現代は、音楽教育のあり方(価値)も混迷しているように思われる。何が正しくて、何が間違っているのか。この迷い多きときこそ、表現の原点に立ち返って、情動の根源にあるものは何なのか、心の鎧を取り払って「自然な状態」で音楽とかかわることが重要だと私は思う。言うまでもなく、20世紀の初頭に、ダルクローズは既存の概念にとらわれないで、音楽表現の原点に回帰して思考し、勇気を持ってリトミックを提唱した。言葉と動きと音楽、この三者の自然な関係性の中に、明日の音楽教育を紐解く糸口があることを、ルソーも、ダルクローズも語っている。私たちが勇気を持って原点回帰しよう。

(かんばら まさゆき/国立音楽大学)